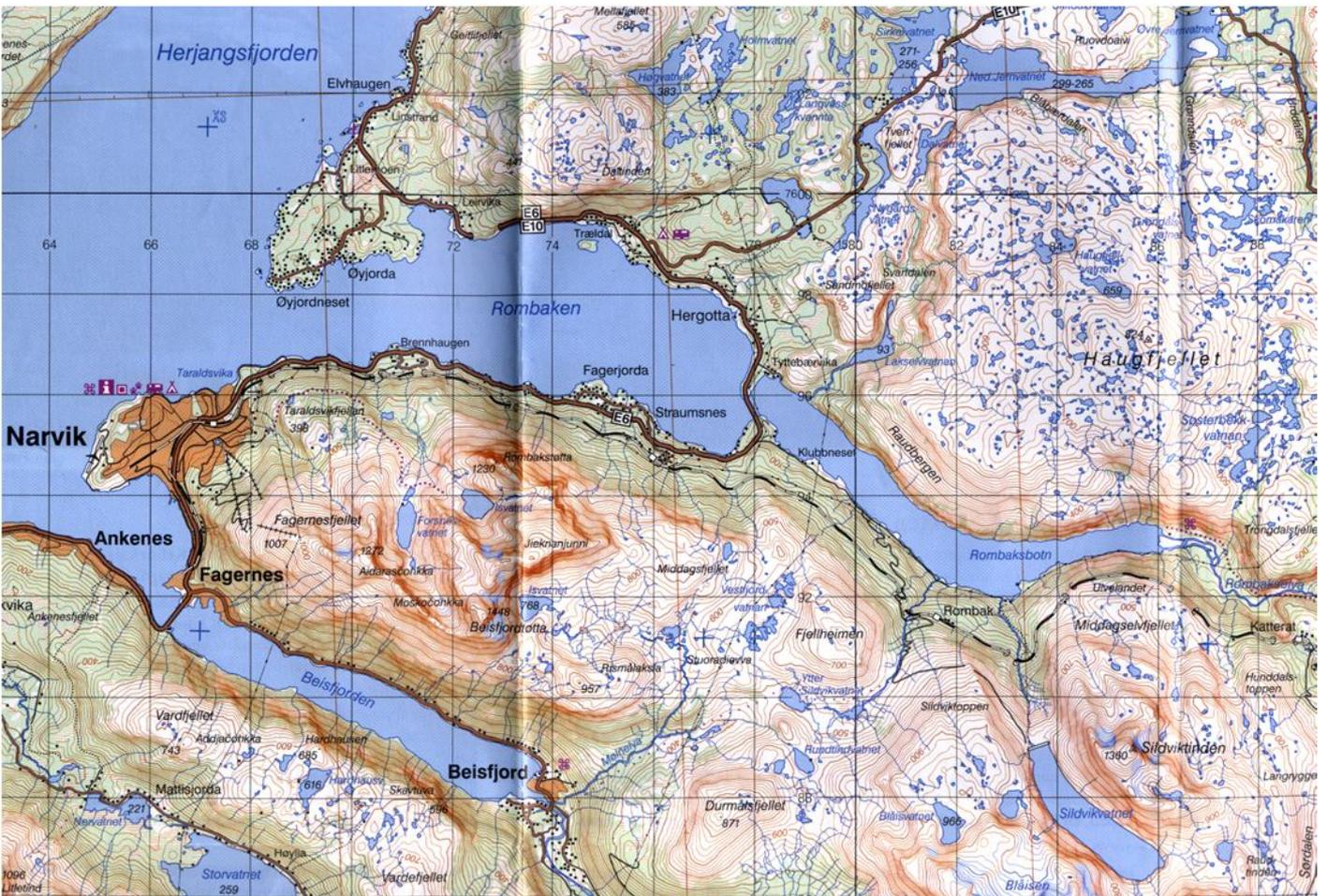


北極圏鉄道紀行 (6)

スウェーデンから国境を越えて、ノルウェーに入った列車は、いよいよこの路線のハイライト、フィヨルドが見える崖の上に差しかかります。



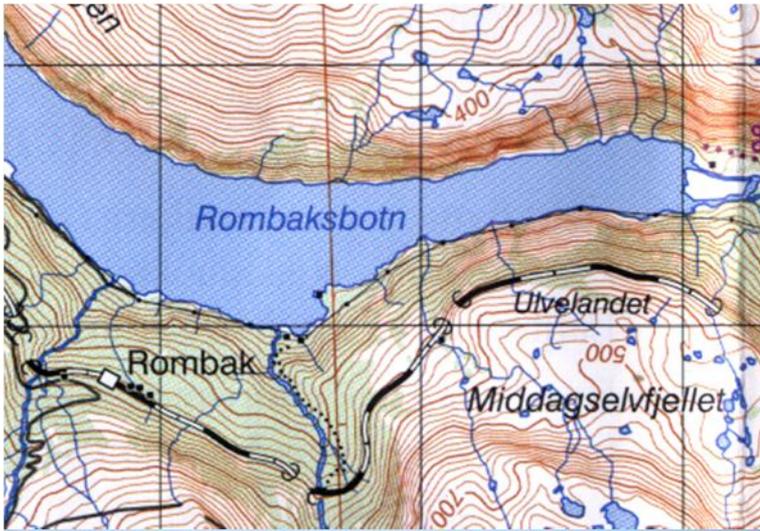
上図は、ノルウェーのフィヨルドからナルビクにかけての地形図です。等高線の密度からも、非常に急峻な地形とわかります。キルナに鉄鉱石の鉱山が発見されたのは17世紀ですが、当時は道路も鉄道もなく、ひどい荒れ道を、トナカイ馬車で運んだそうです。その後、港への大量輸送の必要性が生まれ、世界でも稀な急峻な地形に鉄道を敷設したのです。この鉄道工事のために、専用道路やケーブルカーも設置され、工事の人、食事係、洗濯係までが、泊まり込みで鉄道工事をしたそうです。しかし、急峻な地形から事故も多く、雪崩によって路線変更も余儀なくされたということです。



そこまでしてでも、この鉄道が必要だったのは、スウェーデンが北海側に領土を持たなかったこと、そしてナルビクが北極圏にありながら、暖流の影響で年間を通じて不凍港であることが、大きかったと言えます。

超重量の鉄石列車の通過の為、この線区は法面も線路も、非常に頑丈に作られています。揺れも少なく、非常に乗り心地も良いのです。本来、旅客列車の運行は赤字なのですが、ノルウェーの貨物輸送の大動脈で、膨大な利益を生んでいる鉄道なので、こうして素晴らしい景観を楽しめる国際急行列車を走らせることができるのです。

「地図を見ながら車窓景観を楽しむ」



最初に見えてくるのは、” Rombaksbotn”（ロンバクス・ボトゥン）です。” botn” というのは、「深く切れ込んだ湾」といった意味です。もちろんフィヨルドの一部なのですが、これは、いわば「枝フィヨルド」の一つの、非常に小規模なものです。

大元のフィヨルドはノルウェー本土（スカンジナビア半島）と、ロフォーテン諸島に挟まれた、” Vestfjorden”（ヴェスト・フィヨルド）です。その枝が” Ofotfjorden”（オフォート・フィヨルド）、更にその枝が” Herjangsfjorden”（ヘリャングス・フィヨルド）、更にさらにその枝が、このフィヨルドです。フィヨルドが、いかに複雑な地形か、ということがわかります。

地形図で見ると、線路のある中腹から、一気に250メートルも海に落ち込んでいます。崖の傾斜がややゆるやかになった場所に、線路を敷設していることもわかります。

左写真は、ロンバクス・ボトゥンの最奥部です。フィヨルドは右車窓に見えるので、列車がこのあたりに来ると、乗客は大騒ぎをしながら、全員右側の座席に寄ってしまいます。



フィヨルドというのは、「山の中に海がある」という非常に特殊な地形です。この不思議な景観を眺めながら、列車はナルビクに向かって、少しずつ標高を下げてゆきます。

（つづく）